"とぶ" 行動による行動体制変換の調整

吉 武 清 実

1. はじめに

われわれが、ある行動を発現させ、展開、終止に至らしめるまでの過程には、生体内と生体外からのさまざまな作用を受けている。それが行動体制間の頭のもたれ合い、攻め合いをひき起こす。

行動の切り換わりは、そのような作用のうちのあるものが条件となって生じる（梅津，1976）。いったん切り換わったのちにも、さまざまな作用は続く。行動の発動それ自体が新たな作用を作り出す。場合によっては、そこでの滞りが、救急行動体制変換（梅津，1976）をひき起こすこともできる。

われわれが使用する「さて」、「よし」、「さんはい」、「やるか」等々の音声言語は、そうした粗大な調整によらずして、現行動体制を可能態に移行させ、次の行動をより滑らかに発現させる役を、担っている。この音声言語信号は、いったん発現したのちの作用からくる攻め合いを、“ふっくも”ことに関与している。この種の信号は、“ふっくも”の信号、“on-off”という用語を使うなら、発現と展開に関する“on”信号と言えるものである。

筆者が相互親和的関係をもっている VTOY においては、このような“on”信号を、音声パタンの構成体ではなく、身体の運動が持つようになったと思われた。本稿では、この例について報告する。

2. VTOY における "とぶ" 行動による調整の実例

VTOY（男、係わりの当初13歳 5ヶ月）は、小学校就学の数ヶ月前から、それまで豊富だった音声言語発信を、ほとんど示さなくなった。以後、おそらく拘束の状況での調整として、大脳
例 1

これは1981年12月9日の記録である。場所はB幼稚園の同席。

1）「あと片付けしてから帰ろうよ」A₁が流しで皿洗う間をVは待つ。椅子でドシンドシ
ンとはねている。立った姿勢をとってあらあらしくとびはねる。A₂も同じことを側でやる。

例 2

1982年4月21日と4月28日、自宅での記録である。ここにあげた場所での“とぶ”行動は、
長続きすることなく消失した。

1）（4月21日。Vの家の居間。Vと母親、それにA₄の4人、かつて座っている。）VはA₂
に寄るかわり、背を向けてテレビを見ている。落ちつかない。

2）A₂が「オシッコ行ってらっしゃい」といって立ち上がり、テレビの前で土間の方を向いて
ドンととび、さっと動いて、

3）台所の入口へ来る。ここでドンととび、トイレの前でまたドンととぶ。ドアを開け入る。

4）トイレから出てきたところでとぶ。

5）（2～4）の一連のことと全く同じことが、それに先立つ30分分にも生起している。さら
に、1週間後の4月28日には、次のようにあった。）「オシッコ行ってらっしゃい」と促されて、
Vはかつてから立ち上がる。とうひとつつなガード用マスクを右手で持つ。かつてのそばでは、と
ばない。台所へすっといく。入って2歩でトンととぶ。トイレのドアを前にドンドンととぶ。
入る。出てくる。ドアの前でドンドンととび、すっとかつてへやってくる。

【2】Vの属していた学級の資料と母親からの情報に基づく。
【3】この関わりは、仙台市錦ヶ谷心身障害者相談センター、小野寺久美子氏と共同しての係わりである。
【4】母親からの情報
【5】Vの“とぶ”行動は、膝を曲げずにまくらへとび、体という杭で地面を突くか如くに、元の位置におり
るものの。
例3
1982年5月26日の記録からの抜き書きである。場所はB幼稚園の台所。
1）(台所のテーブルにVは着いている。) VがAsのひとり(A1)の右方を指さす。A1が寄っていく。「かゆい，かゆい」とかいてやるが，そうではないらしい。
2）Vは立ち上がり，1.5m進んでとぶ（図1の〈1〉）。
3）引出しへ行き，スプーンをとり出す。向きを変えれて約1.5m進んで，とぶ（〈2〉）。そのままままさっと進んで椅子に座る。
4）椅子にてはねる。ゼリーのふたを開ける。

図1 例3における“とぶ”行動

例4
例3の1週間後，いっしょに作ったラーメンをテーブルに運ぶ場面からの記録である。場所はB幼稚園の台所。
1）酌け側（As）のひとり（A1）が「はいできました。持っていて，テーブルにね」と促す。
2）Vはそのまん通りを運んでテーブルに置く。笑う。テーブルについてあごをそことに打ちつける。「お著出そうか」とAsがタイミングを失した発信。
3）Vは立ち上がり，テーブルのコーナへ来てビョンととぶ（図2の〈1〉）やそのまま流れのように移動する。
4）引出しの手前へ来てビョンととぶ（〈2〉）。
5）引出しから箸を出して，その場でビョンととぶ（〈3〉）。そのままままさっと移動して，再び椅子に座る。
6）A1の手を自分のあごへ置かせようとする。「食べる前にあごね」とA1。VはあごにA1の手をあてさせて，帽子を幾分深目にかぶったその状態（6）で，食べ始める。
例5
同じV。1982年7月21日、B園へ到着して間もない時間からの記録である。
1）VはA2の手を取り門の外へ向かおうとする（徒歩10分の所に食料品ストアがある）。A2は「カバン置いてから行こう。台所に置いてこよう」。
2）園庭の入り際にとぶ。園庭を抜けて玄関へ。
3）玄関へ入る。あごをたたく。自分で靴を脱ぐ。すのこで立ち上がってピョンピョンととぶ（図3の〈1〉）。
4）玄関の間に上る。そこでとぶ（〈2〉）。
5）自分からしゃがむ。スリッパをとる。A2のもとってくる。またとぶ（〈2〉）。
6）A2について。玄関につづく教室へ入る。2歩入ってすぐにとぶ（〈3〉）。
7）台所へ入る。とんでから（〈4〉）動き出す。椅子が見えてくる。A2が荷物を置こうと椅子へ寄る。ついてきた。
8）とぶ（〈5〉）。A2がVのカバンを椅子に置く。……スーパーへ食材に出る。
9）食材を取り、玄関へ。A2に促されてスリッパをはき、次の教室へ入る。とばす。
10）台所へ入る。とぶ（〈4〉）………。
11）（カフェゼリーをたべおわった。）缶をとりだす前にとぶ。手のばし、袋からとり出す。椅子へ戻り、飲む。
12）ほほ飲みおおる。「缶すぎてにいこ」とA2が誘う。いっしょに立ち上がる。2、3歩でとぶ（〈5〉）。台所を出たところにあるゴミ入れへ投げする。

（6）前者は、あごを打つのを抑制するための。後者は、帽子のひさしにより鼻をおおい加減にすることで、鼻を打つことを抑制するための自発的行動である。
図3 例5における“とぶ”行動

例6
1982年10月13日、例5から約3ヶ月。場所はB幼稚園台所、この間も、とび方が少し変化した。とぶ行動は無視され、また先が地面を離れため、反復されるときには、ズンズンズンズンと速いリズムの、身体が地に沈み込んでいくような動きに見えた。このようなダンスの変質とともに、いまひとつの変化がみられた。

1）ゼリーをひざまずいて食べる。ゼリーをおいた椅子を左手を手刀にして、2度たく。食べおわる。

2）ゴミ入れへ捨てにいく。ゴミ入れの前の棚を手刀でたたいてから捨てる。

211
3) はじめに買物の袋を置いて台へ。その台をたくろ。たたきながら囲りを見ている。流し行く。
4) 流しの台をたくろ。袋を受けとったAがそれを開けてやる。
5) Vは取り出した鍋を鍋に入れる。台をたくろ。台をたくろ………”

例7
例5からの約4ヶ月後の記録。ただし場所は、先のストアとは別のストア。As とは前に1度だけ立ち寄ったことがある。
1) 両手をAれと組み合って、ストアへ入っていく。ドアは開かれている。ドアから2〜3m、ゴムの敷き物が続いている。それが切れるところでかかとをあげておろす仕草を反覆する。ズンズンと身が沈むようなリズムである。終えるときや踏みこむように店へ、Aれとともに進んでいく。
2) (1週間後に、やはり同じストアへ買物に立ち寄ったときのこと)ストアのドアから2〜3m、ゴムの敷き物が切れる地点で停まることなく進み入ったと、思いきや、2歩ほど進んだところ、その向きのまま後足を戻して、重心をそこへ移し、先週と同じくズンズンとかかとをおろす仕草を反覆した。終えると、タイルの広がりへAれとともにつき進んだ。

3. まとめと考察
例1〜7の記録に、そこには含まれていない情報も加えて、整理してみる。
(1) 1981年9月には、As 側から、Vへの行動を促す発信をなすことは、大いにためらわれた。Vはちょっとした圧力で、はげしく自分を打ちかちであった。この時から翌年の2月に至る期間には、“とぶ”行動や“椅子ではねる”行動よりも、自分を扱う行動が顕著であった。時折り、“とぶ”行動や、“椅子ではねる”行動が観察されたとき、それは例1に示すように、行動の停滞時という条件に、大方は対応しているようであった。しかもそれは、おおむね、荒ら荒らしい“とび”や“はね”であった。
(2) 自分を扱う行動の少しずつの減少と反比例して、“とぶ”行動が増加していった。それとともに、単に行動の停滞時にとどまらない仕方で、“とぶ”行動が、V自らの行動体制変換の調整に役立ち始めた（はじめてそれと認められたのは、例2の時期である）。
(3) 例2の時期以前には、荒ら荒らしい“とび”に対して、それが生じる条件を、「どこだ」と/ora「何をした時？」と/oraの特性によって、対応づけることはできなかった。しかし、例2の時期以後、とくに「どこだ」という場所特性に関して、少しずつ対応づけが可能になってきている。
(4) この間、かつてほど、Vに行動を誘う発信をAs は聴取せずともよくなってきている。
(5) 例6の時期になると、もうひとつの大きな変化が見られた。それは、ストアへの10分間に、それまで前方と後方方面以外には目もくれなかったのが、As が指さしたのに応じて、周囲へ・
路上の救急車やバスなど）をゆっくりと見るようになったことである。

6) 周りに目をくれずそそぐさと目的地へ向かっていたところと、例7の2の行動とは、密接に関連していると思える。後者は、ローレンツのハイローガン、マルティーナの“とっって返した”行動（ローレンツ、1970）とよく類似している。それぞれの“とっって返し”も、ともに、微小化の歴史を経て発生したという点で共通の特性を持つ。

7) "とぶ"行動（例5の2）も、それを微小化された姿である“ズンズンとかかとを沈める”行動（例7の1と2）も、場の圧力から生じるたじろぎを、ふっくら役割を果たしていると思われる。そこには、不履行時に“とっって返し”を迫るだけの“御利益”があるようである（例7の2）。

8) "台所に荷物を置いてくる”という行動体制が、全然行至るまでを考えてもみる。この行動がいったん発見して、展開、終止に至るまでの道行きには、生体内・生体外からのさまざまな発信に出会い、それがそれぞれに強さの異なる圧力を作り出す。"台所に荷物を置いてくる“行動体制においては、庭園へ入り際（例5の2）、玄関の間（例5の4）、教室（例5の6）と場所が変わるたびに、それが生じているようである。このように行動の展開にとって、いわばoffの動きとなる圧力があるとき、行動展開のon決定に関与する信号変換操作過程があってはじめて、それは終止に至りえたと想定できる。"とぶ“行動は、その過程に関与する信号となったのだと考えられる。

このとは“引出しを開けて著をとり出す”という行動体制（例4の4～5）を考えてみる。これか、“著をとってくる”という行動（例4の3～5）にとってみれば、やはり道行きでの滞りである。しかしながら例4の4での“とび”は、それを“引出しを開けて著をとり出す”行動の方から見れば、その動きを滑らかにするための“on”信号である。

例2〜7にあらわれた“とび”やその微小化された動きは、そのいずれもが、このような行動の発現と展開のための“on”信号として、行動体制変換の調整の役を担っているとみることができる。

文 献
梅津八三（1976）：心理学的行動因。重複障害教育研究所紀要、創刊号。
ローレンツ（1970）：[日高・久保訳] 攻撃, 1. みすず書房。